千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第16号　一～一四（二〇二〇）
研究論文

保育者養成における「問う力」育成のための文学教材とその価値

――問うことの効果の実感、あるいは村田喜代子「空中区」論――

髙野　浩

一　はじめに

保育者養成のカリキュラムにおいては合計約六週間の保育実習が資格取得要件として含まれている。実習生は、現場に出向いて子どもや施設利用者と関わりながら、対人援助職の仕事について体験的に学ぶことになる。その学びの充実化を図ろうとするとき、ただ指示された通りに、言い換えればマニュアル的に業務を把握し、こなすだけでは大きな不足が生じるだろう。というのも、「対人援助職」と前記したとおり、保育職は子どもや利用者一人ひとりに向き合い、理解を深めつつ、その都度何が必要かを考えなければならない職であるからだ。それだけに自ら模索をしつつ、表面的な技術にとどまらない保育の本質を学ばなければならない。それが成し得なければ、適切な関わりや援助・支援の実現は期待できなくなる。そうした状況を回避するうえで必要になるのは「問う」という行為だろう。その都度、問いを立てながら検討し、答えを見出そうとすることで実習は意義あるものになる。

本稿は、保育実習生が「問う力」を獲得・向上させていくことを大きな目標としつつ、そのために必要な教育活動について文学教材の活用の観点から考えるものである。それに際し、村田喜代子の短編小説「空中区」を取り上げ、作品内部を分析しながら、その教材的価値を検討する。

二　保育実習における「問う力」の必要性と動機的部分の構築

保育実習の実施にあたっては事前指導が行われるが、その際、おそらくはどの養成校の教員も、現場の保育者に積極的に質問をするべきであるということを説いているだろう。また、実習時には必ず養成校の教員が出向き、実習先の担当者と面談を行うが、その際にもしばしば実習生が質問をよくしているかどうかが話題に上る。保育実習をテーマにしたテキストにおいても同様で、やはり実習では質問をすべきことが説かれている。[1] 基本的には、よく質問をすることが実習生の積極性を評価するための指標の一部にもなり、現場の担当者からすれば、その実習生の学びの状況、段階、深化の度合などを図ることができるバロメーター的役割を負うものにもなりえているとみなせるだろう。このような点をふまえれば、やはり実習時に質問が重要視される

のは当然である。

だが、質問と一口に言っても、その中身は多様である。実習生の質問には「次は何をすればいいですか？」といったものがしばしばみられるが、これではなかなか学びの深化は図りにくい。もちろん、積極的に動こうとする意思が実習生にはあるのであろうし、それ自体は評価はできるだろうが、保育の本質的な部分にふれるような問いという意味では、その期待される到達点からはかなりの隔たりがある質問と言わざるを得ない。もちろん、こうした質問も時にはなされるべきものであることは確かではあるが、それ一辺倒では学びの深まりは期待しにくい。次は何をすればよいかを尋ね、その実行を繰り返すだけでは、マニュアル的な職務理解が進むだけである。保育者の行う保育の意図やねらいを探ったり、子どものその時々の心情を慮ったり、どのようにしたら子ども達の利益に繋がるのかを考えたりするなど、その都度、思考を巡らせることが必要になる。もちろんそのように思考する中で、自身の力だけでは答えを導き出せない事柄も多々あるはずだ。そうしたものに突き当たった時、質問がなされるべきで、そこで得られた助言やヒントによって学びは深まっていくことになる。保育者としての多様な職務を、対象や場面、状況に応じて遂行できるようになるために、このような何かを明らかにする行為としての「問い」が大切になってくる。

また、誰かに質問をすることだけが学習内容の深化を実現していくわけではないだろう。保育実習において重視されているのは、振り返りの活動である。保育者養成では反省的実践家[2]の育成が目標化されているが、その「反省」とは省察や振り返りの活動を指し、その充実が期待されている。この省察あるいは振り返りにおいても、「問う」という要素が入り込んでくる。実習時、実習生は実習記録（日誌）を毎日執筆する。そこでは、自らが実習時に見聞したこと、自分自身の言動を素材に省察・振り返りの作業がなされることになる。この時、ただその日にあったことを記録するだけでは不足が生じる。実習初期は一日の流れを把握するという点で一定の意味は存するだろうが、それが幾日も続けば、記録内容も記録執筆自体もルーティン化されてしまうだけだ。やはり、保育者としての資質をブラッシュアップさせていくような学びの深まりが求められることになる。その実現のためには、「問う」という行為が介在してこなければならないはずだ。「なぜ、保育者はあの時、静観していたのか」、「なぜ、あの子どもはあのような発言をしたのか」、「どのようにすれば子ども達に分かりやすい説明ができたのか」などといった「問い」がその都度設けられることで、学びの内容は少しずつ深化する。その日の省察・振り返りの作業を支えるのは、こうした「問う」という行為であろう。

このように、「問う」という行為が実習内容の充実、ひいては保育者としての成長に欠かせないものであることは疑いのないところである。だからこそ前述の如く、養成校の教員も保育実習をテーマにした書籍も、質問することの重要性を説く。だが、その実現のためには「問いを立てる力」「問いの素材を見つける力」の獲得が欠かせない。さらには、動機的部分としての、問いを立てて考えることの意味や効果の実感がなされなければならないはずだ。特に後者の動機的部分の構築は、基礎・基盤をなすものであるだけに重視されねばならないところだろう。

こうした教育活動が保育実習にかかわって実施されるのが望ましいことは明らかであるが、実習指導の現実に鑑みると、このことにかけられる時間数の問題があり、その実現には容易ならざるものがある。また、他の保育・教育系の科目においても同様だろう。このような実状をふまえれば、全学的に複数の科目において、量的な多寡の問題はあろうとも、そうした授業を展開する以外に方法はない。その意味で

は、たとえば稿者が担当する文学系や日本語表現系の科目においても、この点を意識した授業を検討する必要があるということだ。そうしたことから、次節以降では学生の入学前の時期にあたる高校生の読書傾向についてまずは概観する。そのうえで、現代文学作品を一つ取り上げて内容を検討し、「問う力」の獲得を意識しつつ、その土台となる動機的部分の構築の可能性を模索する。

三　高校生の読書傾向と教材文の選定

作品の読解作業を通じて、「問う」ことの有効性・効果の実感が得られることを企図するわけであるが、そこには一つの大きな壁が存する。読書体験の不足や不読率の高まりなど、読書が習慣化していないという問題である。この点について、まずは「子どもの読書の現状（第六五回学校読書調査報告）」[3]に基づいて検討しておこう。

全国学校図書館協議会と毎日新聞社は、一九五五年より毎年、学校読書調査を実施している。その第六五回調査（二〇一九年六月実施）の報告によれば、小中高の全校種で読書冊数（同年五月の一か月間に読んだ本の冊数）は微増の結果を得たという。具体的には、高校生は＋〇．一冊で、五月の一か月間での読書冊数の平均値は一．四冊だという。数値の上昇は喜ばしいことだが、同調査報告も指摘しているとおり、「驚くほどの数字ではな」く、「高校生については三〇年間ほとんど変わっていないという状況」にある。また、学年が上がれば上がるほど読書離れは進み、多忙化する中高生の生活状況をふまえても、「一カ月に一冊程度というのは、あまりにも少ないのではないだろうか」との指摘もなされている。不読率（五月の一か月間の間に一冊も本を読まなかった生徒の割合）については、高校生は五五．三％（このうち高校二、三年生は約六〇％）にのぼる。年ごとに多少の増減はあるものの、依然として高止まりの状況にあるようだ。[4]

さて、読書離れは今なお続いている状況にあるが、読書の中身についてはどうだろうか。同調査では、これまでの読書経験を振り返り、「勉強に役立った」、「今まで知らなかったことがわかった」などといった設問（「はい」、「いいえ」のいずれかで回答）を設け、「読書はどんなことに役立ったのか」ということを分析している。[5]その設問中に「本を読んで感動することができた」というものがある。この設問に対して高校生は、男子が約七五％、女子は九〇％強が「はい」と答えているという。これについて「不読者が多い高校生だが、読書の喜びを知らないわけではない。多くの生徒をより広範な読書へ誘いたい」と同報告には綴られている。気になるのは、「広範な読書」の必要性を指摘していることだ。この叙述の後には、「一口に感動といっても、さまざまな感動のしかたがある。表面的に感情に訴えかける「泣ける」作品だけでなく、深い感動が得られる作品やいろいろな考えが想起され思いが広がる作品へと、広範な読書を働きかけたい」という指摘もなされている。「表面的な感情に訴えかける」ことで得られる感動に傾斜している様子が危惧されていることには注意を払いたい。これに関連する指摘は、同報告の「これまで読んだ本の中でいちばん好きな本」に関するレポートの中にも見受けられる。

ここで、中・高校生が多く挙げた『君の膵臓をたべたい』『君は月夜に光り輝く』などの本について触れておきたい。いわゆる「泣ける」路線の本が、これまでもブームとなった。そして、かつて人気を博した作品が、数年も経たないうちに話題にも上らなくなってしまうこともあった。その原因はなんであろうか。また、「泣ける」ストーリーは、無意識のうちに、「登場人物が、かわいそうだ」「自分はまだ幸せだ」という優越感を含んだ感情を湧き

あがらせ、それが真の感動であるかのように錯覚してしまうという指摘もある。登場人物やストーリーの悲劇性にのみ意識が向けられ、真の感動の広がりや深まりが湧き起こらないままに、思考停止のような状態に陥る可能性も危ぶまれる。[6]

こうした一連の指摘から浮かび上がるのは、読書のあり方の問題であろう。すなわち、ストーリーを把握することが読書だと考えている生徒が多いと考えられているということだ。ただ話の筋をおさえるだけの読書であるがゆえに「思考停止のような状態に陥る可能性」が危惧されるのである。それはつまり、読書行為の中で「問う」ことがなされていないということでもある。不読者はもちろんのこと、本を手にすることがある生徒においても、読書を通じて「問う」ということは十分には実現し得ていないのが現状ということだろう。

ここまで、高校生における読書傾向を読書調査の結果を参考にしながら検討した。前記した状況が進学後に大きく変貌するとは言えないだろう。同様の状況は大学においても引き継がれることにならざるを得ない。そうした状況をふまえたかたちで、教材文の選定はなされなければならない。日常的に本を手にしない学生のことを思えば、できるだけ短い作品を選びたいところだ。授業内で読むという面からしても、短編作品のほうが取り扱いやすいことはたしかだ。また、作品の中に内在するテーマも保育を学ぶ学生にとって身近な話題の方が望ましい。そうした観点から、今回は村田喜代子の「空中区」（『白い山』所収）を取り上げる。その教材価値を検討するために、必然的に読解作業を要することになる。そうしたことから、次節では同作品の内容を検討していく。

四　「空中区」における子どもの存在と不在

村田喜代子は、福岡県出身の作家で、三二歳の一九七七年に「水中の声」を発表し、それ以降本格的な執筆活動に入っている。一九八六年には二作（「熱愛」、「盟友」）続けて芥川賞の候補に上り、一九八七年、「鍋の中」で第九七回芥川賞を受賞した。[7] 以降、数多くの作品を上梓しているが、今回取り上げるのは一九八九年六月四日付「読売新聞（西部本社版）」に掲載された「空中区」という作品である。四百字詰め原稿用紙にして約九枚程度に収まる分量のごく短い作品だ。話の概要は次のようなものである。

夫（喜一）の転勤に伴い、市営アパートの十階の部屋に「わたし」は転居してきた。同じ階はいずれも空室で、人と接触することのない環境で「わたし」と夫は二人で暮らしている。転居後まもなく、隣室に二、三歳くらいの女児をつれた若い夫婦が引っ越してきた。ときおり、隣家の声が聞こえてくる程度で、ひっそりとした住環境は変わらない。ある夕、ベランダに出ていた夫に手招きされて、隣家の若い父親が女児を肩車をして散歩に出かけていく姿を「わたし」は目にする。以来、雨の日を除き、ほぼ毎日のように父娘の散歩をベランダから眺めるのが「わたし」夫婦の日課になった。ある日の夕方、夕立ちがきそうな雲行きの中、父娘が散歩に出るのを「わたし」夫婦は見た。雨足が強まり、やがて父娘の姿は見えなくなった。室内に戻った直後、屋上から階下へ白い長い影のようなものが落下するのを「わたし」夫婦は目撃する。夫は「女だ」と叫んでベランダに飛び出した。「わたし」はベランダ口に留まり、視野いっぱいに上から下へと落ちていった白い長い影を目の前に反芻した。

この作品の舞台となっているのは、「わたし」が住まう市営アパートの十階の一番左端の一室である。最上階であるこの階の他の部屋は当初すべて空室だった。この居室について、山本哲也氏は「空っぽの空間」という言葉を用いながら次のように論じている。

村田喜代子の小説の空間を思い描こうとすると、浮んでくるのは、宙に浮いたような部屋、日常現実のなかの空っぽの空間のイメージである。（中略）村田喜代子の「空中区」や「昼の夢」（いずれも『白い山』所収）のなかの、宙に浮んだ、空っぽの空間をめぐって、わたしは誤読していたのだ。本来、生々しい生活空間であるはずの団地の部屋が、無人の最上階に設定されたのは、そこに作家のどのような意図があったのか。それは、確固たる定点をうしなった現代における「生の不安」のメタファなんかではなかったのである。[8]

山本氏は「空っぽの空間」が村田喜代子の作品には顕著であることを説く。ここで山本氏が述べるところの「空っぽの空間」とは、単に何もない状態ではなく、むしろその空っぽの状態が広がり、充満していった状態を指していると思しい。それを山本氏は「充実した空っぽ」と称している。と同時に、その「充実した空っぽ」には、何か決定的なもの、「存在」の欠損があるとし、「ここにいないという不在・欠損が、村田作品の「空っぽ」のモチーフだといっていい」とする。そのうえで、「空中区」の冒頭を示しつつ、その叙述の中に作者がさりげなくモチーフとしての「空っぽ」に二つの設定を加え、空っぽの空間を現出させているとみている。その二つの設定とは、「主人公の「わたし」が長年勤めた職場を辞め、息抜きをしたい状態にあること。二つめは、あの、現実の生々しさから隔てられたガランとした「空に浮いたような住まい」の場所である」とする。

だが、山本氏が「空っぽの空間」という概念を導き出す契機となっているのは、作家日野啓三による「空っぽの空間」の理念であり、それを村田喜代子に、あるいは「空中区」に即応させることができるかどうかには疑問が残る。また、市営アパート最上階の無人空間が「生の不安」のメタファではないにしても、「生の不安」が作品内に介在していないと言い切ることができるかどうかは、なお検討が必要であろう。一方で、「不在・欠損」という視点は、この作品を理解するうえで必要な視点ではある。ただし、「空中区」で設定された「わたし」の居室において、「不在・欠損」しているものが何かということについて山本氏は明確には言及していない。まずは、この欠損しているものを検討する必要があるだろう。その契機となる表現がやはり作品の冒頭部分にあると思われる。

その頃わたしはS町の市営アパートに住んでいた。八階九階までは人が入っていたが、最上階はまったくの無人で、わたしは夫の喜一とそのガランとした十階のいちばん左端の室に入居した。高所過ぎて生活には多少不便だが、わたし達夫婦には子供もなかった。それに夫の転勤でわたしは長年勤めた職場を去り、当分人との接触から離れて息抜きをしたいと考えていたので、この空に浮いたような住まいは結構理想に近いものだった。（四八頁）[9]

注目すべきは、「わたし達夫婦には子供もなかった」という一節である。いったいなぜ、この文脈の中で子供に関する叙述が入り込むのであろうか。生活に多少の不便さはあるものの、他者と距離をおいた生活を望んでいたことから、わりあい満足していた、という流れが形成できる箇所である。にもかかわらず、唐突に子供がいないから高所

であっても問題ないという内容が入り込んできているのである。[10]

実は、「空中区」はごく短い作品でありながら、頻繁に子供に関わる表現が挿入されている。たとえば、冒頭部分の直後に、市営アパートの様子が記されているが、その中に、「二階から上はふつうの住居で、子供の声や若い主婦達の立ち話の声などが流れている」（四八頁）というくだりがある。さらに、その直後には「二、三歳くらいの女の児をつれた若い夫婦」（四八頁）が隣室に引っ越してきたことが記される。その後も、「隣家は幼児のいるわりにひっそりとして、ときおり女の児のかすかな泣き声や笑い声が若い母親の呼びかける細い声とまじって流れてくる」（四九頁）といった叙述が登場する。また、作品の概要でも示したとおり、「隣家の若い父親が女の児を肩車にして出て行く」（五〇頁）姿を「わたし」は夫と共に目撃し、その様子をつぶさに観察している。「わたし」が住まう空間の周囲には、子供が存在しているのだ。その一方で、「わたし」には子供はいない。子供の不在、このことが「わたし」にどうやら暗い影を落としているのではないか。それは、夫喜一との暮らしのありようを語る箇所で決定的なものになる。子供の不在があらためて念押しされているのだ。

喜一とわたしは家の中にいても、とくにしゃべることもなかった。ときどき休日に二人で映画をみに行って帰りに外食をする。結婚して二十年になっていたが、生活は最初からあまり変化はない。子供がいないので変りようもなかった。私たちは長い間にそういう暮しに慣れていたので不満もかんじることなく、しかしたいして喜びも覚えず、日々を送っていた。（四九頁）

起伏のない夫との単調な生活に不満はないものの、同時に喜びも感じない暮らしであったことが語られる。そうした中に挿入されている「子供がいないので変りようもなかった」という一節は示唆的だ。子供がいさえすれば、その暮らしは変化したかもしれないということをほのめかしている。加えて言えば、先述した冒頭部分の子供不在の表現は、子供がいたならば高所に住むことを選択しないという文脈でも読むことができるはずだ（前記したとおり、市営アパートには子供や若い主婦たちの声が響き渡っているが、それも「上の階にあがっていくにつれて静かになり、ついに十階では鉄のドアの開閉する音さえ途絶えてしまった」（四八頁）とあり、当初は低層階にしか子供はいない。その意味では、「わたし」の住まいは隣人が引っ越してくるまでは子供が存在しえない空間だったといえるだろう）。このように、子供の不在は「わたし」にとって非常に大きな問題として、冒頭以降、継続的に示されているのだ。そのように考えるならば、隣室に子連れの夫婦が引っ越してきたことは、「わたし」にとって何らかの影響を及ぼす事実であったのではないかと想像できるようにもなるだろう。もっとも、本文中には「わたし」がそのように感じたとは記されてはいない。だが少なくとも、高所ゆえに子供が住まう可能性がないと示された場所に子供が移り住んできたという展開は、読者に大きな違和を感じさせるものになりえているだろう。

そうして隣室に引っ越してきた夫婦であるが、「わたし」はこの夫婦の若さに注目をしていた。

わたし達夫婦が引越してきてまもなく、別の一家族が同じ階に移ってきた。隣の室であった。二、三歳くらいの女の児をつれた若い夫婦だった。引越しの挨拶にきたが夫のほうは妻と同じ年か、あるいはもっと年下にみえた。体格は良く、童顔なので、大学のラグビー部の若者が卒業と同時に結婚してしまったようなかんじである。妻のほうはほっそりとした体つきで、静かにこちらの眼

をみてものをいった。落着いた大人の女の物腰をそなえていた。
わたし達夫婦はこの新しい隣人を好ましくおもった。
（四八～四九頁）

「若い夫婦」という直接的な表現に加え、夫については「若者が卒業と同時に結婚してしまったようなかんじ」と表現されている。妻については「落着いた大人の物腰をそなえていた」とあるが、それは若さと裏腹な「落ち着き」や「大人の物腰」なのであり、やはり若さが印象付けられるような表現になっている。出会いの場面で「わたし」は隣人を「若い夫婦」として把握したわけだが、「わたし」はその後もたびたび隣人を若い存在として認識している。「若い母親の呼びかける細い声」（四九頁）、「隣家の若い父親が女の児を肩車にして」（五〇頁）、「若い父親は娘を肩に乗せて」（五〇頁）、「若い父親は雨の日をのぞいて」（五一頁）、「わたしと隣家の若い母親とのあいだには」（五一頁）、「買物に出る若い母親の靴音」（五一頁）、「下の広場を若い父親が」（五一頁）、「若い父親の散歩コース」（五二頁）といったように、「若い」という修飾表現を用いながら隣人夫婦を呼称する。

作中の主たる登場人物は、「わたし」と夫の喜一、隣家の夫と妻、女児の五人のみである。そうしたなかで、隣家の夫婦は、それぞれ女児を基準に「父親」、「母親」と呼称されており、「わたし」と喜一の夫婦との区別も既になされた状態であるのにもかかわらず、「若い父親」、「若い母親」というように若さが強調されているのである。こうした点からも、「わたし」が隣家の夫婦の若さに固執しているさまが読み取れるはずだ。

それではなぜ、執拗に「若い」という形容詞が用いられ続けるのか。隣家の夫婦を「若い」と称するのは、それをとらえる「わたし」自身にほかならない。相手の若さを認識するということは、相対的に自身が年老いた存在であることを意識することである。隣家の夫婦が繰り返し「若い」と称されることの裏側には、自らの老いを突き付けられている「わたし」の問題が潜んでいるということだ。そうであるならば、この若さに言及する表現は、子供の存在、不在の問題とも密接に関わっているだろう。若いにもかかわらず「父親」、「母親」になった隣人夫婦と、一定の年齢に至った今でも子供がいない「わたし」達夫婦とを対比させる表現なのだ。先述した隣人夫婦を女児を基準に呼称することにも同様の意識がみてとれる。子供の不在は、「わたし」の心の中に大きなひっかかりとして残り続けているのだろう。それは、「わたし」の居室における「不在・欠損」でもあるはずだ。

ところで、「わたし」はこの「若い夫婦」、とりわけ「若い母親」をどのように受け止めていたのだろうか。先に引用した部分には、隣家の妻について言及した後に、「わたし達夫婦はこの新しい隣人を好ましくおもった」とあることから、好意的にとらえていたことが窺える。その後、隣家の夫と女児の散歩の光景を目にし、それを日課にするようになるのだが、その直後に読者に大きな違和を与える表現が登場してくる。

しかし昼間、わたしと隣家の若い母親とのあいだにはこれといったつきあいが始まったわけではなかった。わたしは毎日本を読んだり習いはじめたペーパーフラワーに精を出して日を過ごした。ドアの外を女の児をつれて買物に出る若い母親の靴音が通り過ぎることもあったが、彼女がわたしの家に何かを頼みにきたりすることはない。たいてい静かに家の中で子供を遊ばせて暮らしていた。
（五一頁）

この直前には、父子の毎日の散歩姿は見飽きないものであること、

その散歩の様子はただ音もなく地をこするように進むものであったことが描かれている。それに続くのが右の引用部であるが、その冒頭に配された「しかし」という表現に読者はつまづくことになるはずだ。「わたし」はベランダから父子の散歩姿を見ていただけであるが、そのことと隣家の若い母親との間に付き合いが発生することには関係がない。にもかかわらず、「しかし」という接続表現で両者は結ばれている。この「しかし」という表現が配されることにより、隣家の妻と「わたし」との間に関係を深める可能性があり得たととらえる「わたし」の内面が垣間見える。

さらに続けて読み進めると、家の前を隣家の妻が通り過ぎはしても、「彼女がわたしの家に何かを頼みにきたりすることはない」ともあり、より具体的に隣家の妻が「わたし」に何かを頼むという関わり方が考えうるかのような表現が出てくる。いったい隣家の妻が「わたし」に何を頼むことがあり得たというのだろうか。それを考えるヒントは、この前後に配された隣家の妻の平素の動向である。買い物に出るために外出することはあっても、たいていは家で過ごしているという。思えば、女児を連れての散歩は隣家の夫が行うものであり、そこには妻の姿はない。隣家の妻は大半の時間を家の中でのみ過ごしているようで、人付き合いの乏しさが浮かび上がる。この市営アパートは、「二階から上はふつうの住居で、子供の声や若い主婦達の立ち話の声などが流れて」おり、低層階に子供やその保護者の存在が確認されている。そうした子育て家庭と隣家の母子は関係を持ち得ていないようなのだ。つまり、孤立した育児が隣家では行われているということが推察できよう。「空中区」が発表されたのは一九八九年であるが、一九八〇年代は育児ノイローゼや育児不安がクローズアップされてくる時期であるとされる。[11]「孤育て」という造語も近年では一般的に用いられている。核家族化の進行は、子育て経験がない両親のみでの育児を余儀なくした。また、都市部ではとりわけ地域との繋がりも薄くなるため、孤絶した環境で子育てに従事しなくてはならない家庭を生みだした。特に母親が孤立しがちになる。この作品には、このような保育分野にも深く関係するようなテーマが潜んでいるのだ。前に保育を学ぶ学生に身近な題材を含む作品の選定が必要であることを述べたが、子育てをめぐるテーマを内包している「空中区」という作品は、その点において適していると考えられるだろう。

あらためて、あり得たこととして「わたし」によって想像されている、隣家の妻から「わたし」への頼みごととはどのようなものかという問いに立ち戻ろう。その問いに対する答えは、話し相手、相談相手になることかもしれないし、子どもの世話やサポートかもしれない。あるいはそのいずれもという可能性もある。断定することはできないが、孤独な子育てへの何かしらの手助けといったことがイメージされていると読めるのではないだろうか。

五　空に水平に浮かぶ円筒空間

「わたし」によって隣家の妻からの頼みがないことが語られたのち、「ある夕方」の出来事が示される。この日、散歩に行くような空模様ではないにもかかわらず、隣家の夫は娘を連れて散歩に出かける姿を「わたし」達夫婦は目にする。悪天候の情景描写と相まって不穏な空気が漂うなかで父子は散歩をし、やがて雨に閉ざされるかたちで「わたし」達夫婦の視界から消える。そして、「わたし」がベランダから室内に戻った直後に事件が起こっている。

何か隣家の夫婦のあいだに激しいことが起こったのはたしかだった。雨に追われてわたしたちはベランダから部屋へもどると

ガラス戸を閉めた。そのときガラスの上から下に向けて白い長い影のようなものがサアーッと流れた。たぶん屋上からの落下物にちがいない。

「女だ」

と喜一は叫んで、ベランダに飛び出した。窓を開けたので雨音が大きくわたしの耳にかえってきた。彼は身を乗り出して遠い地上をみおろしている。わたしはベランダの戸の所に立ったまま、外へ出なかった。そして視野いっぱいに上から下へ、上から下へ堕ちていく白い長い影を眼の前に反芻した。（五二頁）

作品の最終場面である。屋上からの落下物は夫の喜一の言葉によれば女性である。おそらくそれは隣家の妻であり、飛び降り自殺が図られたと推察してしかるべきだろう。この時「わたし」は、喜一のように飛び降りた女性の行方を確認することなく、ただ「上から下へ、上から下へ堕ちていく白い長い影を眼の前に反芻した」という。なぜ、そのような行為を「わたし」はとったのか。「白い長い影」とは落下した女性を指すのだろうが、「わたし」はそれを女性とは語らない。急速に上から下へと向かう「白い長い影」をただただ繰り返し思い返すだけである。実はこれと同様に急速に移動する白いものは、既に作中に登場していた。

ある夏の朝、玄関のドアと奥のベランダの窓を同時に開けて風を入れていると、畳に置いていた読みかけの新聞がふわりと動き、部屋の中をバサバサと音をたてて這いまわり、それから鳥のように窓の外へと飛び出した。夫の喜一とわたしは朝食の箸を握ったまま、驚いて窓をみた。それは本当に何羽かの白い大きな怪鳥のように空高く舞いあがり、風に乗って飛び去って行ったのである。朝の空には藻のような薄雲がひしめいていて、新聞紙はぐんぐん小さくなっていく。そのとき空はわたしの眼に底の知れない井戸みたいに、深い円筒の空間になって立錐していた。（四九頁）

新聞紙が風をうけて窓から飛び出し、空遠くへと飛び去っていったという情景だ。この時、飛び去る新聞紙は「わたし」の目には「白い大きな怪鳥」に映ったという。その直後、「空はわたしの眼に底の知れない井戸みたいに、深い円筒の空間になって立錐していた」と語られている。この円筒の空間は空に浮かび上がっていることになるが、それはいかなる状態であろうか。「立錐」とあり、錐を突き立てるイメージからすれば、それは本来垂直方向に配置されるべきものである。だが、「白い大きな怪鳥」は上から下へと舞い降りたのではなく、「風にのって」手前から向こうへと飛び去っている。その様子を「わたし」は目で追っていることを思えば、この「深い円筒の空間」は手前から向こうへと水平に配置されたものだと考えるべきだろう。

急速に手前から向こうへと進む白いものと、急速に上から下へと進む白いものは符合していると思しい。違いは上下の移動か水平に移動しているかという点にあるが、錐を突き立てる「立錐」という表現が水平の中に垂直の流れを作り出しており、両者は酷似したものであるとみなせるはずだ。また、新聞紙が飛び出した時の空には「藻のような薄雲」がひしめいていたとあるが、隣家の父子の散歩場面に「十階から眺めると風に揺れる樹木が柔らかい藻のようにみえた。親子はその緑色の藻のあいだをちをこすりこすり進んで行く」（五〇頁）という箇所があり、地表にあるものを藻に見立てている。そうした点を勘案しても、両者は対応関係にあるとみてよいだろう。これらをふまえれば、女性が飛び降りた場面で「わたし」が上から下へと落下する「白い長い影」を反芻していたのは、新聞紙が居室を飛び出した後に目に

浮かんだ「深い円筒の空間」を思い起こし、両者を対比していたからだと考えることができるだろう。

このとき、「わたし」が何を考えていたのかは定かではない。ただ、「喜一とわたしは家の中にいても、とくにしゃべることもなかった」（四九頁）とあるように、夫との会話は乏しく、変化のない生活を送っていた。「長いあいだにそういう暮しに慣れていたので、不満もかんじることなく、しかしたいして喜びも覚えず、日々を送っていた」（四九頁）という箇所からは索漠とした日常を送っていたことが浮かび上がる。そのような場である居室から脱け出た新聞紙は、「わたし」の潜在的な願望を表象するかのごときものであったと見ることもできよう。もっとも、それは「怪鳥」と表現されており、憧れてはならない危険な何かであることも「わたし」は感じ取っていたと思しい。こうした新聞紙が飛び去る際に「わたし」が感じた何かと、屋上から落下する「白い長い影」との重ね合わせを「わたし」は迫られた、それが最終場面での「わたし」の反芻だったのではないか。「わたし」自身も孤立し、心の危機を抱え、それが飽和寸前だったと考えられるのである。

六　冒頭表現「その頃」が示唆するその後

「わたし」の反芻をもって「空中区」という作品は閉じられている。「わたし」が抱える孤立や心の危機が結局どのように処理されたのか、「わたし」は反芻の後に何を考えたのかはわからないままだ。だが、実は作品はその後の顛末の一部をほのめかしている。それは冒頭表現である「その頃」という言葉一つに示されているのだ。あらためて冒頭の一文を見返してみたい。

その頃わたしはS町の市営アパートに住んでいた。

あまりにも簡素な書き出しゆえ、読み飛ばしてしまいがちであるが、ここで一度立ち止まって問いを設ける必要があるだろう。すなわち、「その頃」とはいつか、という問いである。このことについて考えるために、古典文学における「その頃」についての論考を参照しておこう。「その頃」という表現は古くから物語や日記文学で使用されている。吉海直人氏が『源氏物語』成立前後の諸作品の用例を詳細に検討しているが、作品冒頭に「その頃」と置かれる作品は平安期には見られず、鎌倉期以降の作品を待たねばならないという。一方で、『源氏物語』には巻頭に「その頃」という表現を置く例が四例あり、いずれも第三部の巻々であることが指摘されている。その四例の特質を吉海氏は次のように説明する。

> 以上、巻頭の「その頃」を考察してきたわけであるが、「その頃」は前提として既成の時間を有していた。（中略）「その頃」によって、事件の顛末に二つの別々の物語を設定しているのである。そして既成の物語時間を現在とすると、「その頃」以下、しばらく前巻の物語とは別な空間の人物を登場させ、その世界の漠然とした過去から物語を始めるのである。その過去が物語の現在に至った時、はじめて二つの物語が関係を持ち、複雑にからみ合いながら、以前とは違う要素に支配されて、新たに展開し進行していくことになる。[12]

既成の巻に対して、「その頃」で始まる巻は、時間をさかのぼって別系統の話を展開させる。その話の時間が進行することで、既成の巻の時間に近づき、やがて時間的に合流することになる。その合流した

ところから、新たな物語展開を実現させるということである。こうした視点を援用して「空中区」の冒頭表現を眺めてみたい。

まず、「その頃」の前提となる既成の話題であるが、当然のことながら「空中区」にはそれがみあたらない。作品の冒頭に配された表現であり、この短い話それ自体が単体で完結する作品であるからだ。だが、「その頃」という言葉は、自然と既成の話題があることを想起させる表現である。「空中区」の話が語りだされる前に、「わたし」によって語られた何らかの話があることになる。そうした読者の目には触れない、それ以前の話題が存在していることを仮構して読むことを要求する表現といえよう。

では、その仮構された語られざる話題と、「空中区」の話題とが時間的に合流することで、新たに展開される話題とは何か。そうした続編的作品はもちろんない。だが、その新たな展開への糸口は「空中区」の冒頭の一文にわずかに表現されている。すなわち「S町の市営アパートに住んでいた」という文言である。ここからは、既に「わたし」はこの市営アパートには居住していないことが明らかにされていることが読み取れるのだ。と同時に、「わたし」が市営アパートで体験した出来事を経て、今なお生存していることが明かされているのだともいえよう。心の危機の問題がどうなったのか、それは不明のままである。だが、その市営アパート居住時のことを誰かに語る、あるいは書き記すというかたちで表出できるようになったとみることはできよう。そして、「その頃」と語り出す現在の「わたし」の時間を読者は意識し、回想しながら語る現在の「わたし」の姿を思い描くことになる。この読者によって思い描かれる内容こそ、合流後の新たな話題、物語である。

七　結語

四節から六節まで村田喜代子の「空中区」を取り上げ、いくつかの問いを設けてその内容を検討してきた。その問いとはすなわち、「わたし達夫婦には子供もいなかった」という唐突な叙述が存在するのはなぜか、なぜ「わたし」は執拗に隣家の夫婦を「若い」と表現し続けるのか、「わたし」によって想像される隣家の妻から「わたし」への頼みごととはどのようなものか、最終場面で「わたし」が「白い長い影」を反芻するというのはどういうことなのか、作品冒頭に置かれた「その頃」とはいったいいつなのか、といったものである。こうした問いを設け、作品の細部を検討した。それら一連の内容をごく簡単に整理すれば、次のようになる。まず、「空中区」という作品の背景には、子供の存在と不在の問題が潜在化しているということである。さらには、孤独というテーマが作品に通底しており、「わたし」の危機的な状況がほのめかされている。また、「その頃」という冒頭表現によって作品の外側に語られざる話題が存在し、それらを含めたかたちで、考えながら理解することを要求する作品になっている。本論では以上のようなことを述べた。

なお、作品論的な部分で簡単な補足をするとすれば、「わたし」と隣家の妻は対比される存在であるという点があげられるだろう。子供の有無、若さと老いといった点に加え、それぞれ孤独や何らかの危機的状況を抱えていながら、それに対しての行動は対極的だ。「わたし」は飛び去る新聞紙を眺めながら、空に水平に浮かぶ円筒空間を幻視していた。「わたし」はそれを見るだけに留まっているが、最終場面で喜一が口にした「女」だと思しい隣家の妻は飛び降りることを選択している。その先には生と死の対比も構図化されているだろう。そのような二人の女性が「空に浮いたような住まい」に隣り合って暮らして

いたのである。[13]

最後に、「問う力」育成の問題にからめながら「空中区」の教材価値について述べておく。「空中区」は、前述したように短い作品であるため、読むこと自体に苦労するようなものではないが、初読ですっきりと理解できるタイプの作品ではない。つまづきや疑問が立ち現れやすい作品でもある。そうした点を一つ一つ作品内に根拠を求めながら確認していく作業を繰り返すことで、初読の印象に比して再読したときの印象は大きく変わるだろう。この印象の変化こそが大切だ。それはつまり、問いを立てることの効果の実感である。三節で述べたようなストーリーを追う読み方では「空中区」という作品は理解し難いものになるはずだ。ただ受け取るだけの読み方、あるいはとらえ方ではなく、能動的に問いかけながら読むことで何かが立ち現れてくることを実感することが、「問う」姿勢の定着にまず必要なことである。そうした動機的部分の構築から始めなければならない。この点において「空中区」は有効な文学教材としての性格を持ち得ていると言えるだろう。

注

（1）たとえば、百瀬ユカリ『よくわかる保育所実習』（創成社・二〇一一年四月〈第四版〉）では「担任保育者から「何か質問はありますか」と聞かれ、何を質問すればよいのかわからなくて困ってしまったという話をよく聞きます。（中略）保育者の立場から実習生に学んでほしいこと、質問してほしいことは次のようなものです。」（一〇〇頁）として、コンパクトなかたちで年齢別の指標が示されている。

（2）ドナルド・ショーンが提唱した専門家像。保育者養成においても浸透しており、自己省察に取り組むことで成長を図ることが保育者や実習生には期待される。

（3）「学校図書館」八二九号（公益社団法人全国学校図書館協議会・二〇一九年一一月）の特集Ⅰにアンケートの質問と回答集計結果が掲載されている（一五～五三頁）。

（4）小日向輝代「読書冊数はやや増えてはいるが――5月1か月間に本を何冊読んだか――」（前掲注（3）一九～二一頁）参照。

（5）内海淳「「知る楽しみ」は学校の勉強とは別物――読書はどんなことに役だったのか――」（前掲注（3）三九～四三頁）参照。

（6）千葉尊子「好きなのは、幼いころに読んだ大切な本と話題になった本――これまでに読んだ本の中でいちばん好きな本――」（前掲注（3）四八～五三頁）参照。

（7）村田喜代子の事績については、五十嵐朋子「村田喜代子ノート――附・年譜・参考文献目録」（金沢学院大学日本文学研究室「日本文学研究年誌」第五号・一九九六年三月・七七～九九頁）や松谷美樹「村田喜代子書誌」（関西大学大学院文学研究科「千里山文学論集」第八〇号・二〇〇八年九月・七三～一一二頁）、松谷美樹「村田喜代子書誌（二）」（関西大学大学院文学研究科「千里山文学論集」第八一号・二〇〇九年三月・四三～六一頁）にまとめられている。

（8）山本哲也「村田喜代子論――村田喜代子の世界（1）」（第一経済大学経済研究会「第一経大論集」第二一巻第三号・平成三年一二月・一三～二八頁）参照。次段落内の括弧で示した各引用表現も同様。

「空中区」に言及する先行研究はきわめて少なく、山本氏の本

論考のみが同作品について一定程度の分量を割き、検討を加えている。ただし、その意図するところは作家論である。

(9) 村田喜代子「空中区」の本文の引用は『白い山』（文芸春秋・一九九〇年六月・四七～五二頁）に拠る。なお引用の際には、末尾に頁数を付す。

(10) 子どもがいる場合に十階に住むことが問題になるのはいくつかの理由が考えうる。「高所過ぎて生活には多少不便」という本文をふまえれば、まずは幼い子どもを連れての階段利用の困難さが想像される。あるいは、落下の可能性が危惧されていると推測することもできるかもしれない。仮にそのように考えるのであれば、作品の冒頭ですでに最終部分の飛び降りへと結び付く表現が組み込まれているということになる。

(11) 森川敬子「戦後保育体制転換の胎動――失われた20年のもとで「子ども・子育て支援新制度」へ」（汐見稔幸・松本園子・髙田文子・矢治夕起・森川敬子『日本の保育の歴史』萌文出版・二〇一七年一二月・三六八頁）参照。

(12) 吉海直人「源氏物語「その頃」考――続編の新手法――」（「國學院大學大学院文学研究科論集」第六号・昭和五四年三月・三六～三七頁）参照。

(13) 「わたし」と隣家の妻の対比が本作品の中に随所に立ち現れることについては、より詳細な検討を今後試みたい。また、「空に浮いたような住まい」あるいは「空中区」というタイトルについての言及も稿をあらためて行うが、本稿で検討した内容をふまえれば、人から隔絶された空間といった理解になろう。なお、最終場面で喜一が「女」だと発した対象は、隣家の妻だと考えられるが、必ずしも作中で明確になっているわけではない。この点についての検討も次稿に譲るが、隣家の妻だと考える時、なぜ自室のベランダからではなく屋上から飛び降りたのかという問題が生ずることになることを付言しておく。

千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第16号　1～14（2020）
研究論文

保育者養成における「問う力」育成のための文学教材とその価値

― 問うことの効果の実感、あるいは村田喜代子「空中区」論 ―

髙野　浩

Literary teaching materials and its value for the development of ability to ask questions in childcare teacher training

――Experience to realize the significance of asking questions or the study of “Kuchu-ku” by Kiyoko Murata

Hiroshi KONO